

平成20年度 研究助成事業報告

平成20年度京友会研究助成対象者に対する助成期間は平成21年5月31日をもって終了した。6月30日までに、4名全員について報告書を受領した。希望者には報告要旨をコピーしてお渡しする。なお研究費に関する会計報告については、1人10万円の研究費の実施内訳及び領収書を受け取り、事務局で確認を行った。

平成20年度 京友会助成対象者

2008年7月8日 助成委員 皇 紀夫・田中 耕治

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教員名	研究課題
石橋 遼	D2	研究	教育認知心理学	齊藤 智	身体表象のコントロールに関わる機能の実験心理学的・神経科学的検討
井藤 元	D1	研究	臨床教育学	西平 直	シラー美的教育論によるシュタイナー教育の思想史的研究
隼瀬 悠里	M2	研究	比較教育政策学	杉本 均	フィンランドにおける教師教育 - リサーチ・ベースド・エデュケーションに焦点を当てて -
野村 光江	D3	国際研究集会	教育認知心理学	吉川左紀子	感情エピソードを語るときの視線・表情

平成21年度 京友会助成委員会選考結果

審査委員の皇紀夫先生と西平直先生により、京友会平成21年度研究助成金の審査が行われた。応募は7件あり、その中から審査の結果5件が採択された。これまでの研究成果や継続性を踏まえ、問題意識や研究方法が精査され、今後さらなる発展が期待できる研究、オリジナリティのある研究が採択された。

平成21年度 京友会助成対象者

2009年6月4日 助成委員 皇 紀夫・西平 直

氏名	学年	助成の種類	講座	指導教員名	研究課題
広瀬 悠三	D1	研究	臨床教育学	矢野 智司	カントにおける地理教育の教育人間学的研究
田中 哲平	D1	国際研究集会	教育認知心理学	齊藤 智	The nature of retrieval processes in a reading period task : a recall timing analysis
栗田 季佳	M2	研究	教育認知心理学	楠見 孝	潜在的偏見の解消に及ぼす内的偏見抑制動機の効果
嶺本 和沙	D2	研究	こころの未来研究センター	吉川左紀子	表情への順応が表情認識に及ぼす影響 - 順応からの回復に着目して -
工藤 瞳	M2	研究	比較教育政策学	杉本 均	ノンフォーマル教育からオルタナティブ教育へ - ベルギーの働く子どもの学校に着目して -

平成20年度 同窓会国際賞選考結果

国際賞の受賞対象となった趙卿我(チョウギョニア)氏の論文は、韓国における教育評価の実際(遂行評価)に関する説明と分析が詳細になされており、国際賞にふさわしいものであった。

2009年6月4日

氏名	学年	論文題目
趙 卿 我	D1	「韓国における教育評価の現状と課題 - 『遂行評価 (performance assessment)』を中心に -」

夢・対話・魂の活性化

京都大学名誉教授 東山 紘久先生



題目の「夢・対話・魂の活性化」ということですが、われわれカウンセラーは、対話を主にして相談を受けております。対話には、レベルというものがあり、最初に、意識的な対話、意識と意識のレベルの対話についてお話しします。

対話とは、実は理解なのです。したがって、討論とは異なります。討論が“何が正しいか”を求めて議論を戦わせるのに対して、対話は相手の話を聞くことによって、相手を理解して平和をもたらすものです。私の先生であるカール・ロジャース先生は、アイルランド戦争の時に、両方のメンバーをアメリカに集め、エンカウンターグループという出会いのグループを開催して、いかに人間はお互いを理解しあえるかを実践された先生です。これは

『アイアンシャッター』という記録映画にもなっています。今まで殺し合っていたメンバーたちが集まり、カール・ロジャース先生のもとで対話していくのです。そうするとお互いの憎しみが次第に消えて、理解が深まるのです。本当に理解しようと思って相手の話を傾聴していると、人間は自分の気持ちが理解されたと感じ、それによってオープンになり、自分の非、欠点に気づくようになり、今まで敵視していた相手にさえも理解できるようになります。

討論の場合は自分の考えを主張するのみで、話し合いは平行線に終わることが非常に多いです。しかし、正しいことは、例えば諺で、「虎穴に入らずんば虎兇を得ず」－「君子危うきに近寄らず」、「チャンスは前髪つかめ」－「急がば回れ」というように、正反対の正しいことがあります。つまり、正しいことは、1つではなく複数あるのです。

私は、理事と副学長を拝命し、大学の運営に参画してまいりました。役員懇親会で、議案の説明をしていただく時のことですが、他の理事や総長は資料を読んでおられます。私は40数年間、カウンセラーをやっておりますので、資料は置いておきまして、説明者、その人の話を聞く。すると、人間は、自分が引っかかっている箇所を説明する際、表情が変わったり、語調のスピードが落ちたり、「そうである」というところを「そうでない」といいまぢがいをしたりします。その箇所がこの議案の考えなければならないところだと気づくのです。相手が何を一番言いたいのか。何を一番隠したいのかが見えてきます。言っている内容に矛盾のあることに当人自身が気づかないことさえあります。

カウンセリングは、わかっているけれどもできない、やめられないという神経症的行動に対する療法です。人間であれば誰でも一つや二つこれを持っているものです。例えば、喫煙があげられます。煙草は身体に害がある。それは百も承知なのですが、なかなかやめられない。そういう人たちに「害がある。肺がんになる率が高い」と理屈で押しすすめると、反論できないから、その場では「はい、はい」と言いますが、それがストレスになって、今までゆっくり一服吸っていたところをスパスパ数本吸うようになる。結局、注意をしてやめさせようとしているのか、より喫煙を促進するのかわからないことになるのです。頭でわかることが行動と結びつくかどうかの問題なのです。我々は頭で考えていることと実際の行動が違うということが少なくありません。どうして理論と行動の解離が起こるのか。それは、頭で考えたことは意識できていますが、意識できないこと、無意識があって、意識と無意識に解離があるからです。例えば、「あの上司は嫌な奴だ」と心の底で思っている。それは無意識ですから、もちろん気づいていない。意識としては「あれは上司」と思っている。そうすると、その上司と接していると、胃がおかしくなってくる。これが慢性化すると、ストレス性の胃潰瘍になるわけです。しかし、ストレス性の胃潰瘍と言われても、無意識ですから原因はわからないのです。本当の意味のストレスがどこにあるかは、なかなか気づかないので、ストレスと言われて、「ストレスですか。それじゃあ」と言って発散するのは難しい。この頭で考えていることと行動の解離に対して、無意識と意識をどう対話させるかという第二の対話のレベルを考えることになります。

無意識の材料は、いろいろと考えられます。例えば、河合隼雄先生がスイスから持って帰られました箱庭療法。箱庭とは、ミニチュアを砂が入っている箱の中に置いていくものです。カウンセラーはそれを解釈も何もしないで、「ほお」「へえ」と言って見ているだけです。ところが、実際やってみられたらよくわかりますが、箱庭には自分のぴったりくるものしか置けないのです。箱庭に5頭の牛を置いた。それを6頭にしてやろうと考えて6頭入れると、何かわからないけれども気持ち悪いので、やはり5頭にする。このように、ぴったりする位置にぴったりするものし

か置けないのです。このぴったり感というのは、箱庭の治療の最大の治療要因だと言われます。なぜぴったりするかはわからない。だけど、ぴったりしているかどうかは判別がつく。これには無意識が関わっていて、ぴったりするかどうか感じながらアイテムを置いていく過程で、その人は、自身の無意識と話をしているのです。ただこれは、その本人のぴったり感ですからなかなか説明がつかない。

そこで、われわれは無意識の材料として夢を扱います。夢は見ようと思っても見られません。私は、夢は自分の無意識から自分への手紙だと思っているのです。無意識はこう考えているのですという、私から私へのメッセージなのです。多くのカウンセラーが夢分析しています。私の師匠のロジャース先生は解釈に対して反対派です。なぜなら、解釈をすると、せっかくの夢という生の材料が、頭で考えることになってしまうからです。煙草は身体に害がある。理論はわかるけれど実際にやめられないというように。

私に変な夢を見た時、河合先生のところに持っていきますと、「東山さんは、これ、どんなふうに思った？」と言われます。私が答えると「せや、せや。そのとおり」で終わりなのです。先生はどう思われますかと聞いても「いや、きみの言うとおり」と。でも、私の言うとおりだったら、先生はいらないじゃないかとは思わないのです。不思議なのですが、先生が「どう思う？」と言われた途端に、今まで思いもつかなかったようなことがすらすらと出てくるがあるので。

会社人間のような中年の男性の夢を一つご紹介したいと思います。彼は家族のために一生懸命に働いていることを自負して、会社人間であることに対して何のわだかまりもなく頑張っている人でした。その人が夢を見ます。『家族と一緒に寝ていると、だんだん変なおいがしてくる。ものすごく臭く、気分が悪くなるような匂いがしてくる。何だろうと思って見ると、奥さんと子どもが段々腐っていく』。それで目が覚める。この人は友だちなので、「東山さん、ちょっとこんな変な夢を見た。どう思う？」と聞いてくる。私が「どう思う？」と聞くと、「自分は一生懸命、家族のためと思って働いている。その本心は変わらない。だけど、このまま働いていたら、家内と子どもは腐っていくんだらうな」と。「だけど、上司からも期待されているのに、手を抜くわけにいかへん」と。私は「人間には、一つ知恵があるよ。代替可能なものと代替不可能なものがある。どれだけ社会的にその時マイナスであったとしても、代替不可能なほうを優先する。これはものすごく大事なんだ」と言いました。その人は「ここという時はそうする」と。そして、「こういうことがありますので休ませてください」と言うようになる。初めは「この頃、家庭サービスに徹して、会社が二の次になってきた」という周囲の雰囲気だったのですが、そのうち、彼の優しさが出てくるのです。今まで仕事一辺倒で、一生懸命やっているから、人がミスをすると、実際にはその人に言わなくても、気持ちとしてはそうになっていた。それが代替可能か不可能かと

悩むことによって、器が大きくなって、他人を批判する気持ちがなくなっていくのです。上司は「あいつは若いときからようできたけども、ゆとりはなかった。でも、ゆとりのある人間になってきたな」と。大事なポストに「あいつしかない」となる。部下や同僚たちも「やっぱりあの人はすごい」となっていく。夢は、自分の無意識との対話。そして、それを聞く人がいることで話をしている人が、はっと気づかれていく。これが行動を変えるのです。

最後の対話のレベルです。それは大いなるものとの対話です。大いなるものとは、神仏との対話です。大いなるものですから自然でもいいです。神仏は、臨床心理学的に言えば、魂の象徴です。神仏と語ることは、どこか自分の魂と語ることになります。宗教はよく分派が起きますけれど、あたりまえのことで、自分の魂との対話ですから、一つの象徴にはまとまりにくいのです。魂の象徴を意識することは、ものすごく大事なことです。

相談に来られる方もみんな自分たちの魂の象徴がありますので、それと話をしてもらいます。何回も自殺未遂をした人に、死後の世界について、あなたの仏と一回対話してみなさいと言うのです。もちろん、なかなか対話はできません。けれども、対話しようと思っていると夢を見ます。『自殺をして死後の世界に行き、コンクリートの地下牢で、冷たく湿気たところに自分が置かれている。そして、仏に「おまえがここから抜けるのは、56億7千万年後だ」と言われる』という夢。そうすると、自殺したらずっとあんな所に置かれるのか…となり、それまで何度も自殺を試みていた人がぴたっと、とまりました。

教育学部は60周年、つまり還暦です。最後に私の還暦の時の夢をご紹介します。『私は、(ガチャガチャから出てくる球のような)丸い物の中に乗っている。命はどうして生まれるかと考えている。そこへ棒のようなものがいっぱい通過していく。私はあの棒と私が乗っている球が合体すると命が生まれるのかと思う。私の首に穴が二つ空いている。神さまがあらわれ、「命はこうして生まれるのだ」と言って、一つの穴に部品を入れる。そして、神さまは、もう一方の穴から部品を一つと取られて、「これはわしが預かっておこう」という』。私は、それがもう一方の私の穴に刺された時、神に召されるのだなと思いました。不思議なことに前より死が怖くなくなりました。

教育学部が還暦を一区切りにして、未来に向けてどのような夢を持つか。目先のことだけではなくて、みんな一人一人が、そこに寄り集い、みんなが夢を持ち、そしてその夢をどんなふうと考えていくか、展望していくか。その中で教育学部が再生、進化していくことを祈っております。

どうもご清聴ありがとうございました。